優秀賞

僕の手の中の命

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校五年　佐藤 湊人

すき通った羽が、今にも僕の手にふれそうになった。そよそよと風にふかれているようにゆれる羽が、命の灯のように感じた。この夏経験したセミの羽化を、僕は一生忘れない。

セミの音しか耳に入ってこない季節になった。朝からクマゼミの大合唱が聞こえる。昨年も行ったが、今年も自由研究でセミの羽化の観察を行うことにした。今年は羽化できた子もいれば、羽化できずに死んでしまう子もいた。木の根元に転がっていた一匹のアブラゼミの幼虫。当たり前のように羽化できると思い「どんな模様の羽かな」「どんな顔の子かな」と期待して見ていた。しかし、時間は水が流れるかのようにすぎ去っていく。目は出ているのに、そこから先が出てこない。体が出ないのに体をふるわせて体を出そうとする。その姿を見て、僕は心が痛くなり、わんわんと泣いてしまった。それから時間がたってもこの子は出ることが出来なかった。僕はこの時思った。この子が見られなかった空を一度だけでも見せてあげたかった。その思いを今でもずっと覚えている。

セミの合唱が終わりに近づいてきたころ、ふと公園で幼虫を探していると、風が強いので飛ばされたのか、細長い幼虫が転がっていた。おそらく、ツクツクボウシだろう。それを見たしゅん間、羽化出来なかったあの子を思い出した。水びたしになるほど泣いた、あの夜を思い出した。そして、その思いに強くおされ「今度こそは助けたい」という思いがめばえた。木に戻してあげようとしても、つかめない。決心して、虫かごの中に入れ持って帰った。しかし、虫かごの中で、動きが止まってしまった。もしかしたら、また死んでしまうのではないかというきょうふと、今度こそは助けてあげたいという気持ちがまざり合って、どうすることも出来なかった。しばらくすると、横向きのまま、羽化を始めているのが分かった。背中が少しずつ割れてきている。このままでは羽をかわかすときに、羽が伸びずに飛べなくなってしまう。羽化中で足が動かないので、あみ戸につけることが出来ず、手の部分をピンセットで持ってあげた。手がふるえて、ふるえを治そうと思えば思うほど、ふるえてしまう。ずっと持っているのもつらい。そのとき、からから出られず、空を見ることのできなかったあの子を思い出した。「大きな空を見せてあげたい。すき透った羽で空を自由に飛んでほしい」という思いが僕に勇気をあたえ、ふるえをおさえ、がんばらせてくれた。そして、僕の手の中で無事羽化することが出来た。エメラルドグリーンの羽を持つツクツクボウシは、次の日、広い青空へ飛び立っていった。

僕の手の中で羽化したツクツクボウシは僕に命のかがやき、命の強さを教えてくれ、感動をあたえてくれた。僕も、自分の力でしっかり生きてこのかがやく命を大切にしていきたい。